

国立大学法人東京外国語大学

第94回経営協議会議事要旨

I. 日 時：2025（令和7）年1月30日（木） 13：28～14：53

II. 場 所：本部管理棟2階中会議室（ハイフレックス形式）

III. 出席者：(1) 委 員：猪熊委員、來生委員、坂本委員、関谷委員、木部委員、犬飼委員、
林委員、木下委員、成瀬委員、鈴木委員、川村委員、近藤委員
(以上12名)

(2) 陪席者：篠原副学長、中山副学長、菊池副学長、春名副学長、三宅言語文化
学部長、千葉国際社会学部長、柄監事、井澤監事、田中総務企画部
長、安部田会計課長 外

IV. 審議事項：1. 就業規則関係規程の一部改正について
2. 中期計画の変更の認可申請について
3. 理事、副学長の任命について
4. その他

V. 報告事項：1. 令和7年度国立大学法人運営費交付金予定額等について
2. 令和5事業年度における剰余金の翌事業年度への繰越しに係る承認に
ついて
3. 大学の近況等について
4. その他

VI. 懇談事項：1. 大学の「将来像」について
2. その他

VII. 配付資料：1. 国立大学法人東京外国語大学第93回経営協議会議事要旨（案）
2. 就業規則関係規程の一部改正について
3. 国立大学法人東京外国語大学の中期計画新旧対照表（案）
4. 理事、副学長の任命について（案）
5. 令和7年度国立大学法人運営費交付金予定額等について
6. 令和5事業年度における剰余金の翌事業年度への繰越しに係る承認

について

7. TUFs 新着ニュース

8. 大学の「将来像」について

議事に先立ち、林学長から、配付資料1に基づき、前回の議事要旨（案）を確認願いたい旨、発言があり、これを確認した。

VIII. 審議事項：

1. 就業規則関係規程の一部改正について

木下理事から、配付資料2に基づき、就業規則関係規程の一部改正について説明があり、審議の後、これを承認した。

2. 中期計画の変更の認可申請について

林学長から、配付資料3に基づき、中期計画の変更の認可申請について説明があり、審議の後、これを承認した。

3. 理事、副学長の任命について

春名次期学長から、配付資料4に基づき、理事、副学長の任命について説明があり、審議の後、これを承認した。

IX. 報告事項：

1. 令和7年度国立大学法人運営費交付金予定額等について

安部田会計課長から、配付資料5に基づき、令和7年度国立大学法人運営費交付金予定額等について、報告があった。

2. 令和5事業年度における剰余金の翌事業年度への繰越しに係る承認について

安部田会計課長から、配付資料6に基づき、令和5事業年度における剰余金の翌事業年度への繰越しに係る承認について、報告があった。

3. 大学の近況等について

林学長から、配付資料7に基づき、大学の近況等について、報告があった。

X. 懇談事項：

1. 大学の「将来像」について

林学長から、配付資料8に基づき、文部科学省中央教育審議会等における検討状況について報告があった後、大学の「将来像」について、意見交換を行いたい旨の提案があ

り、懇談を行った。

委員からの主な意見等は、次のとおり。

- ・自身の親族が高校生で、国際バカロレア（IB：International Baccalaureate）のコースに通っており、一般の高校の教育とは異なり、生徒が主体的に一生懸命に学習した上でないと、自律性が高い授業についていけないと聞いている。一方、日本の教育は、従来、講義を受けノートに写すといった受動的な教育がなされてきた。大学生の学習時間が減少している中で、バカロレアコースを受ける高校生は、日本の伝統的な教育とは異なる自発性を重視した教育を受けている。一方で、バカロレアのコースの高校生が日本の大学に進学する際には、高い成績基準が求められている。また、昨今の円安の影響で、従来、これらの高校生の関心が強かった海外の大学への進学も、以前より難しい状況になっている。文部科学省がバカロレア校を増やしていることから、今後の学生供給が安定する可能性がある中で、円安が続く限り、バカロレアのコースを受ける高校生の国内の大学への進学志向も高まっている。このような特色ある教育を受けた学生の受け入れについて、本学も戦略的に考える必要であるのではないかと。
- ・自身が所属する大学も、昨年度と比べ、志願者が減る傾向にある。一般入試を選択する高校生は少なくなり、年内に実施する入試に流れている印象を持っている。受験する高校生の気持ちも理解しなくてはならない。国立大学は入試制度上、難しい部分もあるかと思うが、このような傾向に関して、早急に対応を考える必要があるのではないかと。
- ・「将来像」については、2023 年の秋頃に開催された本会（第 89 回）でも取り上げられたと記憶している。その時は、日本に来る留学生等に対して日本語を通して日本を伝えるという方向性と、もう一方、言語を踏まえて、世界諸地域の文化や社会を理解する人材を育成し知見を還元するという方向性が、本学にとって重要であり、前者は順調に進捗しているが、後者の取り組みも今後より明確になるとよいという話であった。今回、本学のホームページを確認したが、動画などで学長も含め、学生が具体的に話しをしていたり、TUFs 地域研究センター（TASC）が色々な方にインタビューを行っていたりと、様々な努力をしていると感じた。また、本学は留学する学生も多く、学部生も卒業までに 5・6 年とかかるということであれば、留学の経験を踏まえた上で、修士課程までつなげるといった考え方もあるのではないかと。加えて、デジタル技術を活用して、世界各地域や日本にいる地方の学生に、ある程度の学習を共有した上で、スクーリングなどで実際に本学に来てもらって、インティメートな交流をする等により、学生を確保するといったことも考えられるのではないかと。
- ・国立大学は、今後、学部定員を減らし、大学院を充実させる方向に進んでいくと思われる。特に地方大学は厳しい状況にあり、文部科学省は一つの大学がフルスペッ

クで機能をもって、運営していく時代ではないと考えている。全国の大学がネットワークを形成し、どこかがハブとなることが重要である。国立大学は、ここまで法人化により個別化や大学間の競争が進んできたが、政策の見直しが行われていると感じている。現在の状況は仕方がない側面もあり、大学は生き延びる方法を模索する必要がある。本学は特色があり、国際的な社会には必ず必要な外国語教育が充実しているため、ハブになれる可能性が高い。そのためには、学生の単位互換や交流が重要であり、教員の循環も必要である。ネットワーク形成を成功させるために、対面での交流が欠かせない。また、外国とのネットワークも重要であり、日本国内のものはもちろんのこと、外国の博士号等の学位を持つことが国際的な職業において強みとなるため、ダブル・ディグリー・プログラムなど、外国の学位を取得できる制度が大きな魅力となるのではないかと考えている。

- ・文部科学省中央教育審議会大学分科会に置かれた部会の議論では、「知の総和」を維持・向上させるためには、「質」、「規模」、「アクセス」が重要だという話であったが、現在の大きな課題は人口が減少していることだと考えている。情報は数多く存在するが、その情報を誰がどのように得ていけばよいか分からず、効果的に活用できていない状況があると思う。また、AI の発展により、学生たちはAI にまかせられるものはまかせ、自分の時間を他の活動に使う傾向が強まっていると感じる。この流れは今後も続くと思われ、スピード感をもって、大学のあり方も変わる必要があると考える。本学に関していえば、どれだけネットワーク的な大学像を構築していけるかが重要だ。例えば、学部1・2年生次はしっかり学んで、3・4年次は、海外交流校等を通じて世界各地域に留学し、第一次情報を取得した上で、自分の研究をその後の1・2年で行うといったことが考えられる。本学の学生にとっては、ハードルが高くないので、修士課程と接続しながら、各々の学びの形が作ればよいと思う。大学の役割として、学生自身が持っている個々の興味に従って、どういう情報があるのかを教え、その情報をどううまく流してあげることができるか、どちらかというファシリテーションやプロセスをどこまで充実させていけるかが、大学の一番の価値になってくると考えている。

以 上